

創立50周年記念論文集の発刊にあたって

リハビリテーション学部長 藤 森 修

この度、名古屋学院大学の創立50周年を記念して、本学の紀要である論集各篇で記念の論文集を発刊することになった。本学の論集は大学とその歴史を一にし、大学の発展とともに充実して来ている。すなわち、大学が開設された1964年に第1巻が刊行された『名古屋学院大学論集』は第7巻（1970年）から「社会科学篇」と「人文・自然科学篇」に分冊され、1988年には「研究年報」が、外国語学部が設置された1990年には「言語・文化篇」が刊行され、最も新しい「医学・健康科学・スポーツ科学篇」が5番目の論集として2012年に発刊されて現在に至っている。このように大学の発展とともに歩んで来た論集が記念論文集として刊行されることは、50周年を言祝ぐ慶事に誠にふさわしい取り組みといえよう。

昨今の大学は最先端の研究でしのぎを削る一部の研究大学と、多くの脱・学術型教育の大学に偏って分かれている。しかし後者であっても、研究なくして優れた大学教育はできない。大学の役割は教育と研究に加え、地域貢献が重要な柱となっているが、本学の教員も教育に費やす時間が増大する中でそれぞれの研究に取り組み、その成果を公表している。研究成果は多くの場合、論文という形で公表されるが、大学が紀要を刊行することは大学教員の研究成果の公表の機会を広げるためにも、また学内外の若い研究者や研究に興味をもつ学生を育てるためにも大切なことである。例えば「医学・健康科学・スポーツ科学篇」は論集の中では唯一査読によって論文採択の可否が決まるが、瀬戸キャンパスから巣立った卒業生からの投稿もあり、査読者の質問や指摘にひとつひとつ応えることで研究を志向する若い理学療法士の論文発表の道場ともなっている。

研究を取り巻く環境や情勢を振り返ると、2013年には日本学術会議が「科学者の行動規範」の改訂版を公表し、研究者の責任や姿勢について改めて自戒を促したばかりであるが、嘆かわしいことに文系、理系を問わず論文の剽窃あるいは改竄、捏造という、公正であるべき研究活動にあるまじき不正行為がたびたび発覚し、研究者の責任や規範が厳しく問われている。自ら研究を立案、計画、実施、報告するのが研究者であり、その実施に当たっては自らの責任と良心に基づいて誠実に行動しなければならない。私の年代の研究者は、このような「研究者のあり方」は研究活動を通して指導者や先達から「当たり前のこと」として無意識のうちに教育されて来たように思う。今は無言の教育とか背中を見て育つという教育が成り立ちにくい時世であるが、改めて襟を正して研究活動に臨み、真摯な態度で研究に打ち込む若い研究者や研究に興味を持つ学生を育てたいと思う。そのためにも、我々の論集は今後もその意義を失うことがないことは明らかであり、名古屋学院大学とともに論集の各篇が益々充実して発展することを願っている。